

限定生産 定番品

シャローゲームのパイオニア komomo SF-125

桑村孝

komomo SF-125が登場した90年代後半。当時、釣具店には多くのバスルアーが並びシーバス用ルアーは今に比べると格段に少なかった事を憶えています。特に私が高校生だった頃の90年代中盤は、選べるルアーも非常に少なく、12センチを超えるサイズのルアーでは中々釣果を得られませんでした。そんな時代に突如として登場したkomomo SF-125。今までのルアーとは明らかに違い、シャローにこだわったルアー。今でこそシーバスのナイトゲームにおいてはシャローエリアや表層を意識しての釣りを展開することは当たり前のようになっています。しかし、当時は多くのアングラーがそれに気付いていませんでした。シーバス釣りを始めたばかりの私も例外ではありませんでした。しかし、このルアーの登場により私の釣りに訪れた変化。細かな潮流を感じやすいフォルム。そして何よりもシャローを引けることから、多くのヒットに持ち込めるシーバス。今では考えられないかも知れませんが、一時はルアーボックスの中にkomomo SF-125しか入っていないこともありました。時代とともに多くのルアーが生まれシチュエーションごとに細かな戦略を立てることで、以前に比べ多くの魚をキャッチすることが出来るようになりました。

しかし、やはり釣りを展開する上で基準となるルアーはkomomo SF-125。今でも変わらない釣果を叩きだせるこのルアーは発売から10年以上経った今も私の一軍登録です。



釣り人生を変えた komomo SF-125

新保明弘

今から12年前の秋、初めて手にしたコモモの印象は、こんなルアー釣れるのか? という疑心でしかなかった。当時はまだリップ付のルアーが主流だった時代。狩野川を中心にシーバスを狙い続けていたが、なかなかそのキャッチ率の低さから、自分で実績のあるルアー以外はキャストする機会、気持ちはすくなくった。

しかし、何時もより早めに釣り場に着いたあの日。ルアーの動きを見ようとしてキャストしたときから自分のシーバスフィッシングが変わった。その日、いきなりの80cmオーバーをキャッチ。サーフェイスの流れを知れ! という新しい感覚を知った時から自分の釣り、人生が変わった。

2010年にリニューアルし、飛距離とアクションに磨きがかかり、そして2012年春。ヒラメの88cm、7.0kgというメモリアルフィッシュを私にプレゼントしてくれた。

今では、必ずシーバス釣行の際にはタックルボックスに入っている。入っていないと不安になる。コモモがそんな存在のアングラーは多いのではないだろうか?



コモモが 僕に与えたもの

浅川和治

円柱状のパッケージに包まれたコモモに出会ったのは、今から14年前の1998年。この頃は、盤州干潟や富津岬でのウェーディングで、70cmオーバーの連発や80~90cmも夢ではないゲームに熱中していた。

しかし、魚影の濃さがありながらも苦戦したのがルアーのスイミングレンジ。シャローを効果的に攻める市販ルアーが、存在しなかった。そこで、リップを短く削るというチューニングを試してはキャッチを伸ばした。

そんな状況下でkomomo SF-125デビューは鮮烈だった。多くのアングラーがルアー名でなく、アイマと呼んでいた記憶がある。当時のルアーとしては細身で良く飛び、何よりこのレンジが爆発的なバイトとキャッチを誇った。シャローゲームでは誰もが必ずタックルケースに入れているルアーで、僕などはコモモデーと題して、コモモ以外のルアーを持たずに干潟を歩いた日もあったが十分に釣れた。コモモしか持って行かないから色の違いでバイトが変わるという知識を深めたのもこの頃。

今でも必ず外せない色はコットンキャンディ。真っ暗な富津岬では活躍した。逆に月夜ならば西村ブラックといったスケルトンカラー。

コモモはこれからも、僕のシャローゲームのベシックにあり続けると思う。

私のフェイバリットルアー komomo SF-125

鈴木斉

山ほど発売されているシーバスルアーで、今も一軍定番に入るルアーは数える程少ない。

昔も今も変わらずシーバスがヒットし続ける。簡単そうで非常に難しい事ではないかと思う! それが可能なのは、ima [komomo SF-125]ではないだろうか。全国各地でシーバスゲームをしている私は、職業上どんな状況であっても必ず結果が求められて来ます。

活性が良くも悪くも、迷ったらkomomo SF-125をキャストすれば、何かしらの答えは返って来ると思っています。現に今まで、数々のフィールドあらゆる場面に、ランカーと呼べるビッグサイズをキャッチしています。特に秋から冬に掛けて産卵を意識したシーバスは、河川内や河口、磯場やサーフなどのシャローエリアにバイトを捕食しに入ってくる。最もランカーが捕食しやすいレンジをキープ出来る元祖シャローラングラー、今年もこのkomomo SF-125で秋の爆釣シーズンを迎え撃ちます。

おたのしみ企画が
続々登場!
今すぐブログをチェック!!
<http://imag.ima-ams.co.jp/>

2012年9月21日~11月20日
開催中!

やっぱり
komomoだね!
秋のシャロー
キャンペーン

キャンペーン
専用受注書
同封!

komomo SF-125 と私

imaテスター達のコモモへの熱き想い!

komomo SF-125との出会い 小川健太郎

管理釣り場でエリアのトラウトをされたことがありますか? そもそもコモモというルアーは、「浮くスプーン」です。使い方は同じ。釣果の続き方も同じです。暴力的に説明するならば、コモモのコツのすべては、管理釣り場のスプーンですぐに習得できるのです。

初めて使用したのは2000年頃でしょうか。お店に並んでいたときは、ただのミノーだと思っていました。この頃ワタクシは釣り雑誌の編集部で、のちのち有名になっていくさまざまなアングラー取材しておりました。特にインターネットも主流ではなかったため、彼らとの話の中で流行を察知していくのですが、この会話で当時、一番登場したのがコモモでした。会話は他社のアングラー達でしたが、非常に強く意識していました。

ただ巻きでフラフラする、レンジをキープしやすい、というのでさっそく使ってみるわけです。なるほど、これは沈まない側のスプーンですね…。その釣果もさることながら、顔つきがイイ。小鳥のような、漫画のような。一尾釣れた時点から、その表情に愛着を持つようになりました。

同時期、雑誌社としてアムズ社とも交流がはじまり、一年ほど経った頃、imaテスターを名乗る男から釣りのお誘いメールが来ました。堀浩輔さんでした。「大阪に引っ越したので、一緒に釣りに行きましょう」と。以後、毎日のように釣りを供にすることになりました。ワタクシの目に、彼は正統派アングラーという印象。彼の釣りは、しっかりと丁寧な動作を解説できるような、美しい釣りでした。日本海、太平洋、彼と行く、必ずコモモが活躍するシーンを目にします。ボックスにはギンリと

「本物」としての komomo SF-125

RED中村

komomo SF-125との付き合いは結構長い方だと思う。このルアーで少なくはない数の「ランカー」は釣って来たものの自負はあるものの、心に残るメモリアルフィッシュだったか、あるいは人生最大サイズのメモリアルフィッシュだったのか? と言われると、はて? 何か凄い魚をkomomo SF-125釣ったのだろうか?? 考え込んでしまう自分がある。思い返してみると、私のメモリアルフィッシュと呼べる釣果はキワを突いたルアーで結果を出したものが多く。それ故、その釣り方は真似が出来ないと言われることがある。存外、コモモのような正統派ルアーでの戦果は私の中では少数派なのである。

しかしである。メモリアルフィッシュを追い詰めて仕留める行程作業の中で、無くてはならない存在がkomomo SF-125である。外洋やウェーディングで入るようなポイントでは、まず最初にkomomo SF-125を使って魚の反応を伺う。そして、流れの方向、流れの



速さを把握し、komomo SF-125が何かに触る感触からバイトの種類を想像し、地形を想像する。そして、komomo SF-125から得た情報を分析して次の一手を導き出す。これはkomomo SF-125が私の最も多くのキャスト回数を誇るルアーであって、最も良く知るルアーだから可能な芸当である。

ファーストモデルのkomomo SF-125が発売されて早くも14年。シーバスの歴史を開拓したラバラカウトダウンは現在も使われ続けている。本物だけは生き残る。シーバスのシャローゲーム開拓者としての金字塔を打ち立てたkomomo SF-125もまた、これからも使われ続ける極めて重要なツールでありレジェンドルアーであると思うのだ。



komomo SF-125 との出会い。

濱本国彦

釣具屋さんで初めてkomomoを見つけた時の衝撃は今でも良く覚えているなあ。筒状の透明のパッケージに入っているイエローヘッドのスケルトンカラーをフックにかけた日から、まさかkomomo SF-125の付き合いがこんなに長くなると思っても居なかった。ただ、僕らのメインフィールドがとてもしゃローだった事も、ハマりにハマった事も、僕らの中では「餌」的扱いで、シーバス釣りたければkomomo SF-125を持ってけよ! みたいなノリが在った位だ。

当時、細身のミノーのリップを削って潜らなくしたり、ポッパーを改造してちょっとだけ潜る様にしたりと、とにかくシャローを攻略する事にヤキになってたのを思い出して、今の僕の釣りのベース&メインとなっている事も事実だし、komomo SF-125にシーバスのアプローチを教えた貰った様にも思う今で御座います。今でも、そしてこれからも…そんな存在のkomomo SF-125であります。

コモモコモモ コモのうち

小林厚治

コモモというネーミングは、アムズデザイン五十嵐社長の娘モモちゃんのモモからいただいた名前だとはあまり知らない。

私が初めてコモモを手にとったときに、そのインパクトのあるコモモというネーミングが瞬時に脳に焼きつき、色も形も綺麗なもので優しい女性のイメージをいただいたことを思い出す。また早口言葉も想起する。「コモモコモモコモモのうち」。だが使ってみるとコモモは猛獣で、干潟や河川のシーバスを片っ端からハントし我々に新境地を与えてくれたのだ。

あれからコモモを使って何匹のシーバスと出会ったのだろうか? 多分千の単位のシーバスとすでに合っているのだろう。

余談だが、アムズデザイン製作第2段のルアーはサスケである。私が思い描くには、多分サスケというネーミングは五十嵐社長が大の酒好きなので酒漬けのときに、サスケキチサケヅケからサスケというネーミングになったんじゃないのかと私は想像している。

兎に角、ネーミングは消費者にイメージを沸かせ、夢を抱かせるので非常に重要であるということである。愛すべきネーミングのコモモに乾杯!

— 限定 —

盤州干潟 ゴーストカラー

コモモ SF-125 komomo SF-125

[全長]125mm [重量]16g [タイプ]フローティング [レンジ]0~30cm [アクション]ローリング+ウォブリング [フック]ST-46 #4 [リング]オリジナル#3

コモモ 125 カウンター komomo 125 counter

[全長]125mm [重量]18g [タイプ]スローフローティング [アクション]ローリング [レンジ]30~40cm [フック]ST-46 #4 [リング]オリジナル#3

komomo SF-125の名を世に知らしめたといっても過言ではない干潟のシャローゲーム。プレッシャーの増加で食い渋る昨今のシーバスに対しても未だにコモモが鉄板であり続けるのは単純にそれが「釣れる」ルアーだからです。ナイトゲームでシークレットとされてきた「ゴースト系」カラーに実釣での実績の高い3色をラインナップ。月明かりを浴びボディ内部で乱反射した光が水中で怪しく煌くゴーストシリーズ。探るレンジやアクションの違いを使い分けたい場合はkomomo SF-125 counter。デイ、ナイトを問わず、干潟攻略には必携です。

数量限定 各1,500本

2012年11月25日発売!
2,205円(税抜2,100円)



ニシムラブラック
#X1498・#X1501

干潟ゲームの開拓者、西村雅裕氏プロデュース「西村ブラック」をリバイバル。下から見上げるシルエットが際立つのが特徴だ。満月のような光量のある場所では強いアピール力を魅せる。ナイトゲームのみならず、デイ干潟でも威力を発揮。



チャートヘッド潮見スパークル
#X1499・#X1502

一見してシンプルなカラーリングだが、通常のリアル系ベイトフィッシュカラーに反応しない、甲殻系ベイトを捕食しているシーバスに効果的。また、秋〜冬にかけての低水温、澄み潮という状況での食いの渋い時に威力を発揮する。



ホワイトバックUVゴースト
#X1500・#X1503

紫外線を反射し怪しく発光するUV塗料(通称ケイムラ)をボディ全体に塗装。デイゲームでは定番中の定番。また、ナイトゲームでも満月の大潮時に使うと、微妙に発光し、離れた場所を回遊するシーバスに対してアピールできる。

※カラーは2アイテム共通。画像はkomomo SF-125。